

# 保育者養成校における造形表現指導 —光と影を用いた表現活動—

加藤 友彦\*

2023年12月1日受理

## 1. はじめに

### 1-1 研究の目的

保育者養成校では、様々な造形表現活動が行われている。ひとつは、子どもの表現活動を支えるために必要な表現方法の習得と、多種多様な材料の体験活動などである。もうひとつは、紙芝居やペープサートなどの児童文化や、保育室内を装飾する壁面構成の製作である。児童文化の製作は、音楽表現、身体表現、言語表現の要素を取り入れた舞台発表の活動となる場合もある。

楨(2008)は、保育者を目指す学生が造形表現を学ぶ目的として、造形表現は乳幼児期に適した非言語コミュニケーションのひとつであり、子どもの表現意欲に応じて様々な表現手段を身につける必要があるとしている。そして、表現したものが目に見える形で残る造形表現の教育的効果として、表現過程を視覚的に共有し、その結果をあとからでも共感しあえることとしている<sup>1)</sup>。

松岡(2009)は、子どもの造形表現活動は大人の造形とは異なる異文化であるとし、保育者に求められる最優先課題は子どもの造形表現の理解としている。そして、大人の造形を子どもにも分かりやすく指導することには、指導者自身の表現を子どもに代理させる危険があると指摘している。また、保育者自身の造形表現能力と指導の能力は一致しないと述べている<sup>2)</sup>。

筆者は、保育者養成校(専門学校と短期大学)で、通算20年にわたり造形表現科目を担当してきた。その中で、保育者をめざす学生の造形表現能力は決して高くはないという実感がある。そして、造形表現に苦手意識のある学生の表現活動への意欲は低い傾向にある。そのような学生に対して、美しさや技巧を気にせず、表現すること自体を楽しむように助言をしても、

美しさや巧みさをよしとする価値観は払拭されないことが多い。

そこで、表現することを楽しみ、造形表現のよさを感じ取り、さらに他者の表現のよさに気づく題材として、2021年度、1年次の授業科目「幼児と表現」で「光と影を用いた表現活動」を実施した。活動の詳細については後述するが、造形表現の特徴である「もの」を用いた活動から離れることを考え、光と影という非物質的要素を用いた表現活動を行った。この時の授業実践を振り返り、内容の改善を図り、2022年度、同じく「幼児と表現」の第8回と第11回の2回にわたり「光と影を用いた表現活動」を実施した。本稿は、「光と影を用いた表現活動」の実践について報告し、その学習効果と課題について述べるものである。

### 1-2 光と影を用いた表現活動の実践

#### 1-2-1 レッジョ・エミリアの実践

第二次大戦後、北イタリアで誕生したレッジョ・エミリアの幼児教育実践は、アートの創造的体験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出すことを特徴としている。その独創的な教育実践は、1970年代にはヨーロッパ各地、1980年代にはアメリカで広く知られるようになった。日本では、ワタリウム美術館で開催された「子どもたちの100の言葉」展(2001)によって広く紹介され、日本の教育関係者に驚きと憧れをもって受け止められた。

「子どもたちの100の言葉」展に続く「驚くべき学びの世界」展(2011)では、「影の物語 出会いの詩学」と名付けられたプロジェクトが紹介されている。このプロジェクトは、レッジョ・エミリア市に開所したローリス・マラグッツィ国際センターの建物内

\*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

で実施された。子どもたちは建物の窓を通して、壁あるいは床に映し出された様々な影を見つけ、その影を紙に写し取る。同じ場所で影は時間とともに変化していき、その一連の流れを写真で記録する。時には、鳥や飛行機の影の通過することもある。このようにして集められた様々な影の記録は、コンピュータに取り込まれ、デジタル技術によってアニメ化される。そしてさらに、子どもたちの物語が添えられる。このプロジェクトの意義は次のように説明される。

結果として語られる物語のなかでは、光と影という科学的な要素は、美的なものと同関係的なものを含む構造的な役割を持っています。また、偶然の出会いによって、場所そのものにより深く、より詩的な、生き生きとしたアイデンティティを与える役割を持っています。

影という現象をとらえるために、最初は影を紙に写し取ることを経て、写真（おそらくデジタル・カメラ）で記録することに意味がある。即ち、最初から記録を目的とするのであれば写真に撮れば済むことを、紙に写し取るという行為を通し、身体感覚を経て、時間とともに変化する影の不思議さに気づくことにつながると推察する<sup>3)</sup>。

### 1-2-2 保育現場の実践

安部（2014）は、影のもつ「そこにあるのに、そこにはない」という逆説性に着目し、影遊びの実践例をもとに、子どもにとっての影について考察をした。この中で、愛知県の2つの保育施設での影遊びについての報告がある。

愛知県岡崎市の保育園では、地面に映ったこいのぼりの影に気づいた子どもの言葉をきっかけにして影遊びが始まる。保育者は子どもが影に興味を持ったタイミングで、光（太陽）の位置と影の関係について感覚的な理解につながる援助をする。また、名古屋市の幼稚園では、子どもたちが影ふみ遊びをする中で生まれた疑問から、影についての科学的な検証を試みる。影に映すモチーフが何であれ、結果的に黒い（暗い）影の映ることを通して、影についての認識を新たにす。感覚的な疑問から始まり、科学的なものの見方へとつながる実践として紹介され

ている。

保育現場の実践をふまえて、安部は科学的アプローチの妥当性について考察を進め、自然現象としての影には人の想像力をかきたてる要素もあることを指摘する。また、前述したレズジョ・エミリアの「影の物語」のプロジェクトに言及し、影に対する物語的なアプローチが求められるとしている<sup>4)</sup>。

### 1-2-3 保育者志望学生を対象とした実践

深田・佐々木（2015）は、レズジョ・エミリアの幼児教育に触発され、主に保育や教育を学ぶ大学生（2年生）を対象に、光と影をテーマとした授業実践について報告している。3つの表現活動を通して、科学的な概念や知識を再確認し、審美性にあふれた学びの体験ができたとしている。3つの表現活動は、どれも屋内で暗室を用意し、光源として、ライトテーブル<sup>註1)</sup>、懐中電灯、PC、プロジェクターなどを使用している。あわせて、光を反射する鏡、光を通す材料（ビー玉やおはじきなど）、光を通さない材料（小さなフィギュアや毛糸など）、自然物（落ち葉や貝殻や小石）など、多様な材料を活用している。深田・佐々木の実践は、光と色による美的な体験をすると同時に、影の存在にまで意識が向かい、多種多様な光と影を体験する豊かな学習機会であったと考えられる。その一方で、機器の準備や対象となる子どもたちの知的水準を考えると、保育・幼児教育の中での活用には困難があるといえる<sup>5)</sup>。

## 1-3 研究の経緯

### 1-3-1 2021年度の授業実践

大阪健康福祉短期大学保育・幼児教育学科（以下、本学科とする）では、2021年度より授業科目「幼児と表現」を実施した。音楽表現担当教員、言語表現担当教員、造形表現担当教員（筆者）の3名による科目である。

筆者は第8回の「光と影の表現活動」で3つの題材で構成した表現活動を実践した。その中のひとつとして、光（太陽光）によってできる影を用いた表現活動を行った。数名のグループになり、学舎周辺の屋外で影を用いた表現を行い、画像を撮影した。（図1）



〈図1〉2021年度作品

### 1-3-2 日本美術教育学会での発表と授業の振り返り

上記の授業実践を、第71回 日本美術教育学会 学術研究大会 瀬戸内大会（2022年8月18～20日／香川県立大学）で発表し、さらに、発表後の質疑応答等では授業改善にむけて、いくつかの提案があった<sup>6)</sup>。表現活動を通して認められた成果は、有効な学習の効果として継続し、反省点・課題にもとづき改善を図った。

まず、1コマ（90分）の授業で3つの課題を実施することは適切ではないと判断し、題材を1つに絞り、2回で実施することを考えた。最初の回では、光（太陽光）によってできる影を用いた表現活動、次の回では作品鑑賞と活動の振り返りをする事とした。

次に、スマートフォンの撮影機能を使えば、何枚もの画像を撮ることのできることから、連続する複数枚の画像による表現とすることを考えた。これは、日本美術教育学会の発表後の質疑応答の中で、動画撮影による表現の提案があったことから想起した。デジタル・ネイティブである多くの学生にとっては、興味深い活動となることが予想された。しかし、その一方で、動画撮影の遊びで終わってしまうことの懸念があり、静止画による表現とした。

### 1-4 研究方法

2022年度の授業を通して、学生の学習の様子、作品、ワークシートの記述から表現活動の妥当性を考察する。ワークシートの記述は、表現活動の感想、作品の鑑賞文、表現活動の幼少期の経験、表現活動と保育・幼児教育の学びとの関連、表現活動の保育・幼児教育の中での活用の5項目である。

## 2. 授業の概要

### 2-1 2022年度を受講生

2022年度に受講した第5期生は入学時41名であっ

た。内訳は男性6名（14.6%）、女性35名（85.4%）である。学卒学生34名（82.9%）、既卒学生（社会人経験者、大学中途退学者）7名（17.1%）である。

前年度まで、1セメスター（1年次前期、4～8月）に開講していた造形表現の基礎科目である「造形Ⅰ」（必修科目）がなくなったため、事前に、造形表現の知識・技能がどこまで備わっているかの把握はできなかった。受講までに大学で経験した造形表現活動は「表現技術Ⅰ」（1セメスター開講）と「表現技術Ⅱ」（2セメスター開講）2科目であった。

このうち、「表現技術Ⅰ」では、保育実習で自己紹介をするためのアイテムを製作し発表した。学生の製作したアイテムには、スケッチブックシアターなどの描画作品、描画に加え工作的な要素のあるペープサート、手芸作品のパペットや指人形などがあった。作品を見る限りでは、造形表現を好む、あるいは得意とする学生のいる一方で、苦手意識のある学生もいると推測された。本学科に入学する学生の前年度までの傾向は、表現科目では造形表現よりも音楽表現を好み、また、得意とする学生が多く、5期生も同様な傾向にあると推察された。

### 2-2 学習目標

学習目標は以下の4つである。

- ①光と影を用いた表現活動を楽しむ。（第8回）
- ②光と影を用いて工夫して表現する。（第8回）
- ③鑑賞をして他者の表現のよさを感じ取る。（第11回）
- ④表現と鑑賞の活動を通して、幼児と表現について考察する。（第11回）

### 2-3 第8回「光と影①」

日時 2022年11月15日 2限（10:40～12:10）

場所 第1講義棟 第1講義室、本学科敷地内

【学生の活動】

- ①前年度作品をスライドで見て活動をイメージした。  
〈図1〉
- ②任意のグループ（5人前後、事前に予告済み）を組み、表現の構想を練った。
- ③構想にしたがい、屋外で表現活動を行った。スマートフォンで写真を撮り、画像は教員のPCのアドレスに送った。
- ④表現活動後、室内に戻りワークシートに記述をした。

#### 【教員の指導・支援】

学生は造形表現活動の中で、結果としての作品を気にすることが多い。始めに、表現活動の過程を大切にすることを伝えた。表現活動については、学生の主体的な活動となるように、活動中の助言等は控えた。活動中に質問等があれば適宜回答した。ワークシートの記述については、文章の記述に苦手意識のある学生もいるので、机間巡視をして助言をした。

#### 2-3-1 表現活動の条件

表現活動に条件をつけることで、表現の工夫につながることを期待した。条件は以下の通りである。

- ・影の形には人が関わる。全身や体の一部で表現してもよい。手指を使ってもよい。
- ・影以外の要素を補助的に用いてもよい。
- ・影の映る場所を工夫する。アスファルト、コンクリート、舗石、建物の壁面などの人工物に加え、草、土、砂地、木の幹や葉、水面などの自然物も考えられる。
- ・撮影枚数は4枚以上6枚以内とする。
- ・テーマにはストーリー性のあること。起承転結、繰り返し、ループ（円環構造）などが考えられる。
- ・画像の加工はしない。

#### 2-3-2 表現活動の様子

本学科のキャンパスは結婚式場の建物を改装している。講義棟はもとより、敷地内には人工物、自然物の様々な環境がある。敷地内の環境を活かした表現活動となることを期待した。

グループのメンバーは任意とした。短時間で構想を練り、協力して活動するためには、普段の学生生活の中でコミュニケーションをとれるメンバーであることが適していると考えたからである。

影をつくるには、適切な日光が必要である。11月中

旬のこの日、やや曇り気味であったものの、影ができる程度に太陽は出ていた。学生は、授業時間に屋外に出ることで開放的になり、大学敷地内の様々な場所で表現活動を試みていた。スマートフォンで写真を撮ることは、学生の日常生活の一部であり、慣れていた。撮影をするごとに画像の確認をし、場合によっては何度か撮り直しをして、よりよい表現を目指していた。

#### 2-3-3 表現活動の感想の記述

表現活動を終わると第1講義室に戻り、各グループで表現の工夫について話し合い、共有し、ワークシートに記述した。続いて、個人で表現活動の感想をワークシートに記述した。ワークシートの記述をもって授業を終えた。

#### 2-4 第11回「光と影②」

日時 2022年11月25日 2限（10:40～12:10）

場所 第2講義棟 多目的室

#### 【学生の活動】

- ①スライドに映した作品（画像）を個人で鑑賞した。
- ②各グループの発表をした。発表を聞きながら、再度、作品を鑑賞した。発表グループ以外から感想を述べた。
- ③ワークシートに鑑賞文を記述した。
- ④ワークシートに保育・幼児教育における「光と影を用いた表現活動」の考察を記述した。

#### 【教員の指導・支援】

事前に学生から送られた画像を編集して、鑑賞の準備をした。鑑賞活動では、学生が自由に積極的に発言できるように、適宜、助言した。ワークシートの記述が具体的になるように、机間巡視をして、必要に応じて助言した。

#### 2-4-1 1回目の鑑賞活動の様子

前回（第8回）の表現活動では、お互いに各グループの活動の様子を見てはいたものの、どのような作品となったのかを互いに知ることはなかった。初めて、スライドに映しだされた各グループの作品を見て、学生からは共感、驚き、賞賛の声が上がった。中には、笑い声や戸惑いの声が上がった作品もあった。

#### 2-4-2 各グループの発表と2回目の鑑賞、鑑賞文の記述

1回目の鑑賞後、各グループで集まり、自分たちの作品について、テーマ、ストーリー、表現の意図や工夫について確認した。1グループずつ、代表者が画像を見せながら発表をした。発表後には質疑応答の時間を設けた。質問のない場合は感想を述べた。すべてのグループの発表後、個人でワークシートに鑑賞文を記述した。

### 2-4-3 考察の記述

鑑賞文の記述後、「光と影を用いた表現活動」を考察した。幼少期の経験（過去）、保育・幼児教育の学びとの関連（現在）、保育・幼児教育の中での活用（未来）の3項目について考察し、個人でワークシートに記述した。考察の記述をもって授業を終えた（授業時間内に記述できない場合は、後日の提出とした）。

## 3 学生の作品

### 3-1 Aグループ（4人）

学生の考えたストーリーを5場面で構成した。手指、上半身、落ち葉による表現で、影はアスファルトの上に映した。画面は正方形に統一し、視点は一定である。コマ漫画のような印象である。森のいきものが花びら（落ち葉を見立てている）を運び、最後に人間が花にしたというストーリーである。森のいきものは、キツネ（第1場面）、イヌ（第2場面）、トリ（第3場面）、オオカミ（第4場面）を、手指で影絵の表現をアレンジしている。第4場面までは、同じ構図、同じ大きさとし、最後の第5場面では、少し引いた画面でクライマックスとしている。影と自然物（落ち葉）を組み合わせた柔軟な発想と統一した表現である。〈図2〉



〈図2〉Aグループの作品「大きな花を咲かせよう」

### 3-2 Bグループ（4人）

よく知られているイソップ物語「うさぎとかめ」を4場面で構成した。手指と頭部を使った表現で、影はアスファルトの上に映した。画面は縦長の長方形（第1～3場面）と正方形（第4場面）の組み合わせと

し、視点は一定である。物語に忠実な起承転結の明快な構成である。物語の場面を再現するために、手指の形や組み合わせを工夫して、うさぎとかめの細かな部分まで意識して表現した。自然光を活用する難しさが、影の色の薄さに現われた。〈図3〉



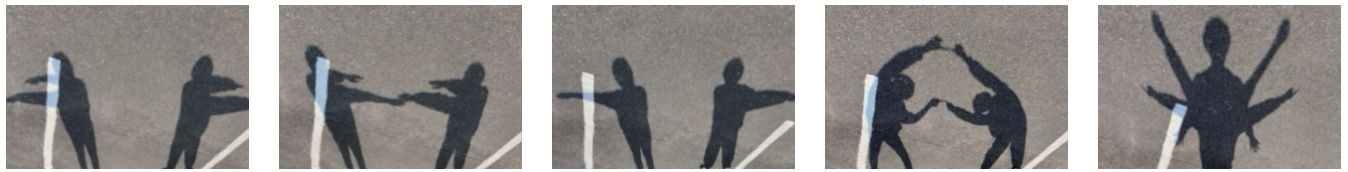
〈図3〉Bグループの作品「うさぎとかめ～競走～」

### 3-3 Cグループ（4人）

テレビ・アニメから発想したストーリーを5場面で構成した。全身を使った表現で、影はアスファルトの上に映した。画面は横長の長方形に統一し、視点は一定である。繰り返しと変化を組み合わせた構成に工夫

がある。第1場面と第3場面を同じような構図とポーズで、第2場面と第4場面では同じような構図でポーズに変化をつけている。最終の第5場面で意外な展開となっている。撮影場所である駐車場の白線（爆発するときの光線と見立てている）も造形要素として取り

入れ、シンメトリーの構図にアクセントを入れている。〈図4〉

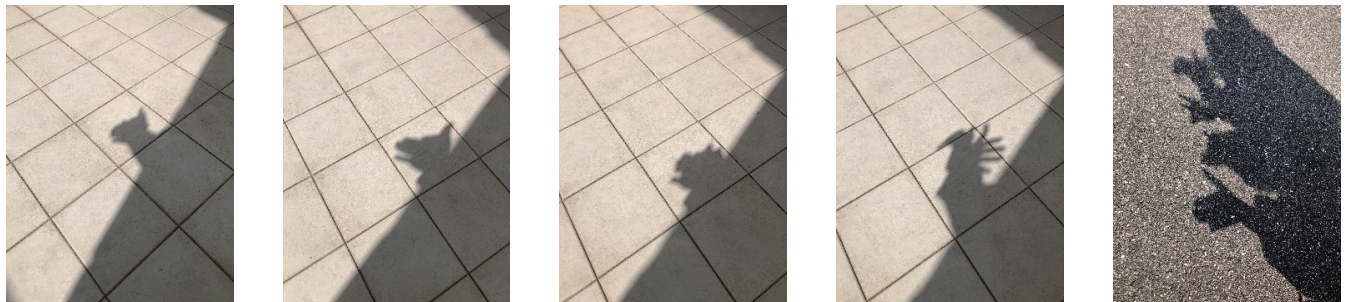


〈図4〉Cグループの作品「フュージョン」

### 3-4 Dグループ（6人） ※表現活動では1名欠席。

よく知られているグリム童話「ブレーメンの音楽隊」を5場面で構成した。手指と頭部を使って表現し、影は舗石（第1～4場面）とアスファルト（第5場面）の上に映した。画面は縦長の長方形で統一し、視点は一定である。ロバ（第1場面）、イヌ（第2場

面）、ネコ（第3場面）、ニワトリ（第4場面）までを同じ構図で表現し、第5場面は場所も構図も変え、明確な対比とした。それぞれの動物の特徴を表すための工夫があり、第5場面で動物が積み重なって化け物になるシーンも効果的である。〈図5〉

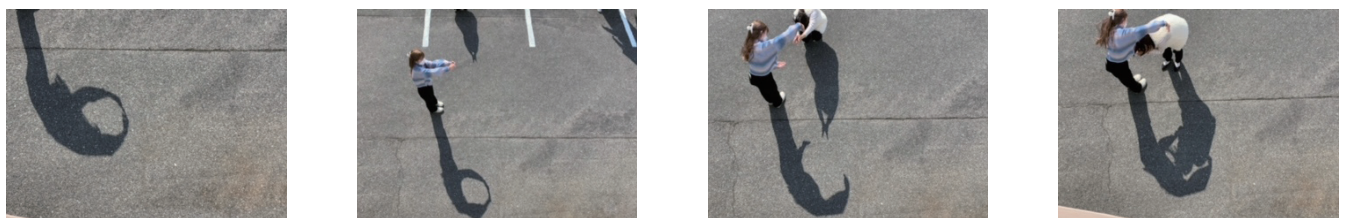


〈図5〉Dグループの作品「ブレーメンの音楽隊」

### 3-5 Eグループ（3人）

学生の考えたストーリーを4場面で構成した。全身を使った表現で、影はアスファルトに映した。画面は横長の長方形で統一し、建物2階の高い位置から撮影

した。視点は一定である。得体の知れない何かを捕食するというユニークなストーリーが面白い。柔軟な発想で、全身を使いながらも人間ではないものを表現した。〈図6〉

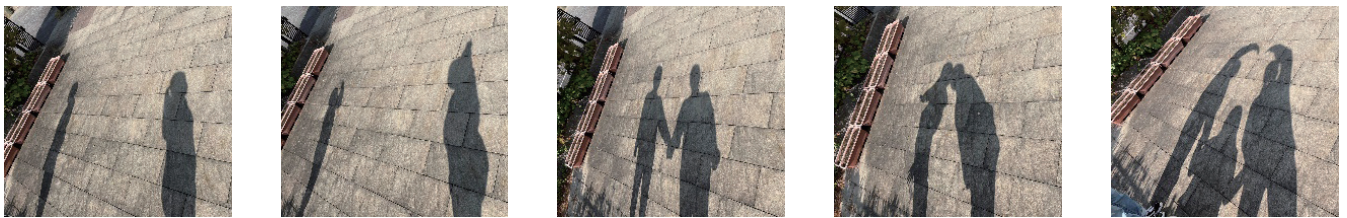


〈図6〉Eグループの作品「漁～魚が捕まるまで～」

### 3-6 Fグループ（5人）

学生の考えたストーリーを5場面で構成した。全身を使った表現で、影はアスファルトに映した。画面は縦長の長方形で統一し、斜め上から撮影した。視点は

一定である。男女の出会いから、結婚して、家族が増えるまでのストーリーは、学生の現在の興味・関心をストレートに表している。ポーズが直接的でわかりやすい。〈図7〉



〈図7〉Fグループの作品「幸せとは」

### 3-7 Gグループ（5人）

学生の考えたストーリーを5場面で構成した。上半身を使った表現で、影は草地に映した。画面は横長の長方形（第1場面）と縦長の長方形（第2～5場面）の組み合わせとし、視点は一定である。散歩をしなが

ら、様々な遊びが生まれていく様子を表現した。第1場面と第2～5場面の対比があり、他のグループには見られない構成となっている。第2～5場面の展開は変奏曲のようである。〈図8〉



〈図8〉Gグループ「友だちとの秋散歩」

### 3-8 Hグループ（5人）

学生の考えたストーリーを5場面で構成した。全身を使った表現で、影はアスファルトに映した。画面は

縦長の長方形で統一し、視点は一定である。Fグループと似たストーリーと構成である。第1～3場面までは連続性があり、第4場面で変化をつけている。〈図9〉



〈図9〉Hグループの作品「人と人のつながり」

### 3-9 作品のまとめ

8つのグループがそれぞれに工夫して表現活動をした。各グループの題材の重複を避ける配慮はしなかったにもかかわらず、様々な傾向の作品となった。既存の物語をテーマとしたのは2グループ、自分たちでストーリーを考えたのは6グループであった。主に手指を使い、影絵の応用で動物などを表現したのは3グループ、全身または半身で表現したのは5グループで

あった。4場面で構成したのは2グループ、5場面で構成したのは2グループ、5場面で構成したのは6グループであった。影を映す場所は、アスファルトや舗石などの人工物を選んだのが7グループ、草地を選んだのは1グループであった。画面の大きさを統一したのは6グループ、変化をつけたのは2グループであった。

## 4. 表現活動と鑑賞活動

### 4-1 表現活動の感想

表現活動の感想を記述で求めた。以下に各グループの学生の主な感想を記す<sup>注2)</sup>。

#### 学生6 (Fグループ)

いろいろな物語を考えることはできるが、それを影で表現することは難しかった。影の撮り方も角度や向きなどで全く違うものに見えることがわかった。また、少ない枚数で物語を相手に伝える難しさを感じた。

#### 学生10 (Dグループ)

グループでテーマを決めて、アイデアを出し合うことで、スムーズに進めることができました。そして影を映すときにアドバイスをしながら協力して活動することができました。また、1人1人が影をつくる努力をすることで、よい作品をつくることができました。

#### 学生12 (Aグループ)

影で表現することは意外と難しいと感じました。距離感がつかめなかったり、影の大きさがバラバラになってしまったりして、苦戦するところもありました。しかし、グループで試行錯誤しながら作品をつくることはとても楽しかったし、表現活動のよい経験になったと思います。

#### 学生17 (Hグループ)

自分たちの体や手だけで表現するのはとても難しかったです。それでも、グループの人とどのようにしたらよいか協力して活動できたのでよかったです。

#### 学生22 (Bグループ)

太陽の光の向きを考えて、どうしたら映ってほしいところに映るのか考えることが大変でした。地面がでこぼこだったり草が生えていたりする場所だと、きれいに影が映らなかったの、きれいに影の映る場所を見つけて、いいタイミングで撮ることも大変でした。周りに色々な影があっどのように使うのか悩んだけど、うまくストーリーに入れることができましたと思います。

#### 学生30 (Eグループ)

なるべく体が写らないようにすることが大変でした。今回はアスファルトで撮影しましたが、草や土で撮影するのもありだと思いました。ストーリー性があることで、作った人がどんな思いで撮ったのかがよく伝わると思いました。

#### 学生36 (Cグループ)

太陽の位置によって影の出る位置が違ってくるので、場所設定が難しいと思いました。また、2、3人が重なって1つの影として表現するときは、細かいところで調整が必要だったため、1枚の写真で影を表現するのは大変だと感じました。

#### 学生39 (Gグループ)

光と影をテーマに撮ると、どこからがいいか、どんな形で撮るかななどを工夫するのか、意外にも難しかった。影絵で一つのストーリーをつくるという発想が面白くて、活動が楽しかった。影絵以外にも別の撮り方を知りたいと思った。

### 4-2 表現活動の感想のまとめ

活動を通して感じたことを記述で求めた。学生の記述で最も多かったのは「難しかった・大変だった」の20人(62.5%)であった。次いで、「協同的な学びができた」の13人(40.6%)であった。以下、「楽しかった・楽しむことができた」の9人(21.8%)、「撮影方法に工夫した」の7人(21.9%)、「自然物の活用方法や多様性に気づいた」の6人(18.8%)、「表現へのこだわり、意欲、満足」の4人(12.5%)、「新たな学びがあった」の2人(6.3%)、「保育への活用」の1人(3.1%)であった。(N=32)

最も回答の多かった「難しかった・大変だった」の理由は5つに分類できた。その中で、最も多かったのは「影で表現すること」の11人(55%)、次いで、「身体や体で表現すること」の7人(35%)、「影を写すタイミング」の3人(15%)、「少ない枚数でストーリーをつくること」の2人(10%)、「余計なものが写ってしまう」の1人(5%)であった。(N=20)

表現することの難しさ、大変さを感じた学生は6割を超え、自然現象としての影を用いて表現することの難しさを感じていた。ただし「意外にも」という言葉が付き、簡単にできると考えていた活動が、実際には

そうでもなかったことによる。また、グループによる協同的な学びや活動の楽しさへの言及があり、難しさ・大変さの中に学びや楽しさがあったと考える。

#### 4-3 鑑賞活動の感想

鑑賞の感想を記述で求めた。以下に学生の主な感想を記す。

学生4 (Dグループ)

それぞれのグループが、手や全身、落ち葉を使う工夫をしながら、少ない場面の中でストーリー性のある表現をしていました。想像通りのもの、解説を聞いて自分の想像を超えるものがありました。また、個々で表現する良さ、グループで表現する良さがありますが、今回はグループで表現する良さがあったと思いました。

学生11 (Aグループ)

どのグループも手や身体全体を使って、物語や場面を表現して学びになりました。特に、Eグループ、Hグループは目的や目標をもって取り組んでいてとてもよいと思いました。また、Gグループは、友達と散歩をしている楽しい様子を影で表現していて、新たな表現方法を学びました。

学生21 (Cグループ)

影の表現は、見ている人によって感じ方や想像するストーリーが異なる表現だと思った。説明を受けた後でイメージがとても変わったグループの作品もあり、影の表現一つでも奥深いと思った。

学生28 (Bグループ)

グループごとに表現するものが異なっていた。写真から楽しんでいることが伝わってきて、表現者が楽しむ姿勢が大切だと感じた。子どもに誘いかけるときに、発見したときの喜びや楽しさを共有できるように全力で表現していきたい。自然と親しみ、表現することの喜びを体験できて子ども目線になることができたと思った。

#### 4-4 鑑賞活動の感想のまとめ

鑑賞して感じ取ったことを自由記述で回答を求めた。学生の記述でもっと多かったのは、「おもしろ

かった・楽しかった」の14人 (51.4%) であった。続いて「表現方法を知る機会となった」の10人 (37.0%)、「表現の工夫があった」の9人 (33.3%)、「学びや気づきがあった」の6人 (22.2%) であった。以下、「表現の奥深さを知った」「表現の喜びを感じた」「表現の難しさを感じた」のそれぞれ1人 (3.7%) であった。(N=27)

半数の学生が「おもしろかった・楽しかった」と述べた。製作グループによる表現の意図(解説)を共有することで、より深い読み取りになった。1枚の画像から、ストーリー性を読み取ることは難しいが、複数枚数の構成で読み取りやすくなった。ただし、作者の意図が絶対ではなく、表されたものを鑑賞者によって自由に読み取ることが鑑賞のおもしろさでもある。

### 5. 幼児の表現の考察

#### 5-1 幼少期の経験

幼少期の「光と影の表現」の経験について、具体的に記述することを求めた。この場合、子どもの表現活動は「遊び」なので、学生に「光と影の遊び」と考えてよいと伝えた。

「光と影の表現」の経験が「ある」と回答した学生は24人 (80%)、一方、「ない」と回答した学生は6人 (20%) であった。(N=30)

「ある」と回答した学生の経験した遊びで、複数の回答があったのは、「手指による影絵」、「全身を使った影絵」、「影ふみ」、「影ふみ鬼」の4つであった。「影ふみ」と「影ふみ鬼」は、鬼と遊びのルールの有無が2つの遊びの違いと考えられ、影をふむ行為を楽しむ「影ふみ」と鬼遊びの一種である「影ふみ鬼」は異なる遊びとした。「影をふんで移動する遊び」「影に沿って歩く遊び」「走る自動車の影をふまない遊び」は、行為そのものを楽しむ「影ふみ」の一種とした。

複数回答のあった4つの遊びの中で最も多かったのは「影ふみ鬼」の11人 (45.8%) であった。次に「手指による影絵」と「全身を使った影絵」のともに8人 (33.3%)、「影ふみ」の5人 (20.8%) であった。1人しか回答のなかった遊びには、「カラーセロハンを使った工作」「影絵劇づくり」「切り紙による影絵遊び」といった工作的な遊びもあれば、「影絵劇の鑑賞」「シルエット・クイズ」といった受動的な遊びもあった。また、「色つきのピンを光に当てて楽しむ」遊びもあった。(N=24)

## 5-2 幼少期の経験のまとめ

「光と影の遊び」の経験のある学生は8割であった。遊びは、体を使い、行為そのものを楽しむ「影ふみ」とその発展である「影ふみ鬼」、影のイメージを楽しむ「手指による影絵」、「全身を使った影絵」が大半を占めた。それ以外の遊びはあまりなかった。また、2割の学生が幼少期に「光と影の遊び」の経験のなかったことは、幼少期の自然体験が乏しくなりつつあることを示していると推察する。

## 5-3 保育・幼児教育の学びとの関連

「光と影の表現」を現在、学んでいる保育・幼児教育の原理や、身近な問題、離れた問題に適用すると、どのようなことが考えられるかについて、ワークシートに記述した。以下に学生の主な考察を記す。

### 学生3 (Dグループ)

現在は、紫外線の問題があり、直接日光を見ないように指導したり、戸外に出るときは日焼け止めを塗布したりすることを推奨している。安全面に配慮しながら行うことが大切である。今の子どもたちはコロナ感染症のこともあり、戸外遊びができない状況ではあるが、数人で戸外にて影ふみ遊びや一人で影絵を楽しんでほしいと願う。それは、日光に当たることでセロトニンが分泌され、夜には快眠ができるからである。

### 学生29 (Hグループ)

影の裏側には愛や絆などの思いが込められているため、保育では、子どもが泣いたり嫌がったりする背景には何があるのか、考える必要がある。

### 学生33 (Aグループ)

実習で子どもと関わった際に、以前（私たちが幼少のころ）に比べ、影にあまり関心がない子どもが多いように感じた。その理由としては、外で遊ぶ機会が減っているからではないかと考える。自然に触れる機会をより増やすために、保育園で保育者がそのような環境を整えることが大切になると考えた。

### 学生40 (Dグループ)

「光と影」という意識しないと気付かない世界

で遊ぶことは、日常の不思議に触れ合うことで、新たな発達が促されると思いました。また、自分の作品だけでなく、友達の作品が作られるまでの製作の過程を見ることで、他人の表現のねらいを知って、人間関係が深まると同時に、表現の幅も広がると思います。光に当てないと結果の見えない「光と影」の表現は、子どもの活動にはとても良いものだと考えました。

## 5-4 保育・幼児教育の学びとの関連

表現活動として実施する中、健康、人間関係、環境など保育5領域と関連した記述に加え、心理と関連付けた記述もあった。保育は、各領域が互いに関連していることをふまえると、様々な視点からの学びがあった。「光と影」の非物質性や科学性から、広い学びにつながった。作品そのものは残らずに記録として残る今回の活動からは、活動そのものの意味を問い直し、学生自身の興味・関心と結びついた記述となったと考える。

## 5-5 保育・幼児教育の中での「光と影の表現」の活用

「光と影の表現」を保育・幼児教育の中で、どのように活用したらよいかについて、ワークシートに記述した。以下に学生の主な考察を記す。

### 学生2 (Bグループ)

園庭にある遊具の影に乗って遊んだり、ぶら下がる動作したりして遊ぶことができると思います。また保育者が子どもでも簡単にできる影絵のお手本を見せて、ともに遊ぶこともできます。そして、子どもの影絵で物語をつくって、披露する場をつくることで、影の楽しさを子ども全体で楽しめると思いました。

### 学生7 (Dグループ)

光と影のおもしろさ、不思議さに気づくための環境構成（例えば窓際に型紙を準備しておくなど）をし、そこから発展して子どもたちが影を創造していく取り組みにつなげたい。『光の旅 影の旅』という絵本があるが、読み聞かせをすることで発展する気もする。クラスで大きな作品を作り上げたり、バリ島の影絵のように、お芝居にして

発表会で演じたりするのもおもしろいと思う。

#### 学生16 (Aグループ)

子どもたちと影を使い、見立て遊びを楽しみ、なりきることの楽しさを伝える。影を使い鬼ごっこなどの全身を使う遊びをすることで、運動機能の発達につながる。また、影を使うことで、太陽の位置や、昼を過ぎたら影が逆向きにつくなど、自然について考える機会を得ることができる。

#### 学生27 (Bグループ)

天気の良い日は外に出て、太陽の光を使って影で遊び、室内では暗い環境を用意して、懐中電灯などの光を使った遊びに活かしていきたいです。スタンドグラスを使ったり、影を映し出す場所をあらかじめ決めたりしておくことで、スムーズの活動ができると思います。

### 5-6 保育・幼児教育の中での「光と影の表現」の活用

学生は「光と影を用いた表現活動」の直前に、初めての実習（保育所実習、10日間）を終えており、「影ふみ」や「影ふみ鬼」、「影絵遊び」など定番の影遊び以外の活動の提案があった。保育・幼児教育の中で実践するためには、難しいことも予想されるが、柔軟な発想のあったことを評価したい。

## 6 まとめ

### 6-1 総括

以上のように、「光と影を用いた表現活動」には様々な学びがあった。

表現活動を難しいと感じながら、同時にグループで活動に取り組む楽しさを味わうことができた。学生にとって、スマートフォンで何かを撮影することは日常生活の一部であり、表現活動の得意な学生も、そうではない学生も、互いにアイデアを出し合い、協力して学ぶことができた。

鑑賞では、肯定的な記述が大半を占めた。描いたりつくったりする活動や演じる活動の鑑賞では、「おもしろい・楽しい」とする感想は少なく作者の表現意図の読み取りや造形的な工夫に焦点が当たることが多い。表現の条件としてストーリー性を取り入れたこと

が鑑賞活動の充実につながったと考える。

### 6-2 残された課題

2021年度の活動を経て2022年度の活動に臨んだものの、課題もあった。

まず、大学敷地内の環境を活かしきれなかったことがある。参考として見た前年度の作品には、学舎の壁面や敷地内の構造物を利用した例もあった。2022年度はアスファルトに影を映したグループが多くあった。当日の気象条件から、鮮明に影の映らない場所を避けた可能性もあるが、もっと環境に目を向ける必要があった。

また、影以外の要素が映り込まないようにする配慮の欠けていた例もあった。「もの」に働きかけ、描いたりつくったりする表現力は求められない活動だったので、表現したいものの見せ方は重要となる。表したいものを思い通りに表すためには、表現技術以外に知識や感性も必要と感じた。

今回の実践を通して明らかになった課題の改善を図り、学生の学びの深まる授業を実践していきたいと考える。

### 6-3 謝辞等

授業改善に向けて貴重なご意見をいただいた日本美術教育学会会員みなさま、また作品掲載に快く応じた学生みなさんに、この場を借りて感謝する。ありがとうございました。

## 注

注1) ライトテーブルとはレッジョ・エミリアの幼児教育で用いられ、様々な光を生活から体験するしかけであり、市販製品のないことから実践にあたり自作したとのことである。

注2) 学生の記述については、誤字脱字は修正し、文意の伝わりにくい箇所に限って筆者が補筆した。

## 参考文献・引用文献

- 1) 楨英子 (2008)『保育をひらく造形表現』萌文書林 11-12
- 2) 松岡宏明 (2008)「幼児造形の理解」大橋功監修・編著『美術教育概論 (改訂版)』日本文教出版 054-068
- 3) 佐藤学監修 ワタリウム美術館編 (2011)『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』(株式会社 ACCESS) 74-75

- 4) 深田昭三・佐々木昌夫 (2015)「保育者志望者学生を対象とした光と影をテーマとする授業実践の検討」『愛媛大学教育学部紀要第62巻』 79-88
- 5) 安部貴洋 (2014)「子どもにとって影とは何か—影の科学から影の物語へ—」『八戸学院短期大学研究紀要第38巻』 11-17
- 6) 加藤友彦 (2023)「保育者養成校における授業実践—学内環境を活用した光の表現、影の表現—」『美術教育No. 307日本美術教育学会学会誌』 082-083